

**聖書 マタイによる福音書6章1節～4節**

1節「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。2節だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。3節 施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。4節 あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

**説教 『隠れたことを見ておられる神があなたがたに報いて下さる。』**

◆今日の箇所を含む6章1節～18節には、「施し」と「祈り」と「断食」に関する主イエス様の御言葉が記されております。これらの三つの行いは、当時のユダヤ教の三大徳目でありました。そして、これら三つの徳目自体は、ユダヤ教においても、キリスト教においても、信仰に生きる者にとって大事な徳目、徳行であります。主イエス様もこれら自体を否定はしておられません。しかし、これら三つの信仰の業を、台無しにしてしまう歪み、転倒について警告を発しておられるのであります。

◆これら三つの教えに続いて6章19節～21節に、『天に富を積みなさい』という小見出しの付いた教えが記されています。「19 あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。20 富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」と。ここで「富は、天に積みなさい」と教えておられます。「富」つまり「信仰の行い」が、「天」つまり「神様」に心を向けてなされているか、それとも「地」つまり「人」の賞賛を求めてなされているかによって、その人の信仰の真価が問われるわけであります。

◆今日の御言葉の2節に、「あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない」と注意されています。「自分の前でラッパを吹き鳴らす」とは文字通り、「吹聴する」ことです。また3節で「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならな

い」とも言われています。「右の手のすることを左の手に知らせる」とは、金勘定をする所作であって、自分の徳行を自分で査定する姿です。人の評価を求める姿であります。信仰の行いは、神様の無条件の御憐れみに捕えられた者の魂から、おのずから溢れ出るものであって、それは神様への感謝の業以外の何ものでもありません。

◆わたしは今日の御言葉を聞きつつ、本マタイ福音書25章31節～46節に記されている『すべての民族を裁く』との小見出しの付いた主イエス様の御言葉に思いが向かいました。少し長いですが、前半の31節～40節までを読みます。「31 人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33 羊を右に、山羊を左に置く。34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』40 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」

◆ここで神様に祝福され、天の世継ぎとされた人たちは、自分たちがなした人々への親切、施しについて、「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか」と、驚きつつ言うております。それらの数々の行ないは、神様の御恵みに対する心からの感謝としてなされたのであって、自らの善行を誇り、数えながらなされたのでは決してなかったことを示しています。すると、主なる神様はこう言われます。「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と。このお言葉は旧新約聖書全巻において証しされている神様、イエス様の本性の中核を示す自己証言のお言葉であります。

◆今日の礼拝には大阪女学院中学3年の生徒さんが3人来られています。 “マザーテレサ”さんの名前は知っていると思います。“マザーテレサ”さんは、インドのカルカッタで『神の愛の宣教者会』を起こし、文字通り貧しい人々に奉仕する生涯を送った方です。シスターは

上で読みましたマタイによる福音書25章40節の、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」とのイエス様の御言葉に捕らえられたのです。ですから行き倒れの人や貧しい人々への奉仕の業は、それらの人々と共におられるイエス様御自身への感謝、奉仕の業でもあるわけです。ですから、奉仕活動は単なるボランティア活動とは違うのです。神様に対する感謝の行為、イエス様への感謝の奉仕なのです。マタイによる福音書に記されてイエス様の最後の御言葉をご存じですか。28章の20節ですが、イエス様はこのように仰っておられます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。正に、イエス様は「インマヌエル」＝「わたしと共におられる神様」なのです。誰よりも小さく卑しいこの私と共に常に、永久に、共にいて下さる御方なのです。

◆この「わたしは共にいる」との主イエス様の御言葉は、旧約聖書においては神様御自身が、くりかえし、くりかえし語っておられるところです。私たちは、特に、あのイザヤ書46章4節の御言葉を忘れることはできません。「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」皆さんご存知のようにイザヤ書は66章からなる大きな預言書ですが、時代背景の違う三つの部分に分けられます。そして40章～55章は、便宜的に、「第二イザヤ」と呼ばれ、いわゆる「バビロン捕囚」期の預言者(『苦難の僕』と呼ばれる預言者で、「イエス・キリストの予型」とされる預言者です。)の書です。上記の46章4節の御言葉は、イスラエルの民が非常に厳しいバビロン捕囚下にある民に呼びかける神様の御言葉なのです。そしてこの「第二イザヤ」書には、「わたしはあなたと共にいる」との御言葉が繰り返し、繰り返し語られて、民を励ましておられるのです。

◆また「信仰の父」と言われるアブラハムの生涯においても、「神、共にいます」事は、あの「イサク奉獻」の記事(創世記21章)において、印象的に語られています。神様は、アブラハムの一挙手一倒足を、時々刻々見ておられるのです。22章10節にこうあります。「そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、『アブラハム、アブラハム』と呼びかけた。彼が、『はい』と答えると、御使いは言った。『その子に手を下すな。何にもしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。』」旧約聖書の神様は、正に「ヤハウエ・イルエ」(＝神は備えて下さる＝神は見ておられる)の神様なのです。

◆また『出エジプト記』の3章の「モーセの召命」の記事の7節以下にこのようにあります。「主は言われた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者

のゆえに叫ぶかれらの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、・・・わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出す』と。このように神様が言われてもなお怯むモーセに神様は言われます。「わたしは必ずあなたと共にいる」と。上のアブラハムの記事と云い、この「モーセの召命」の記事と云い、これらは、大部な旧約聖書の一部ですが、わたしは、旧約聖書の核心に当たる記事だと思っています。これらは、「インマヌエル」＝「神、我らと共にいます」事の、神様御自身の自己証言の御言葉なのです。その神様に心が向かい、その神様に魂が満たされること、それ以外に、信仰者の慰め、幸いはありません。

◆私たちの人生には、光の時と闇の時があります。2月9日に始まった平昌オリンピックも今日で閉幕ですが、日本選手の活躍には目を見張るものがありましたね。正に、ドラマに次ぐドラマと言った感じで、実にドラマティックでした。オリンピック選手は、選ばれた人の中の選ばれた人たちですが、人知れぬ訓練があったであろうことは想像に難くありません。挫折のどん底も味わい、それに耐え、今回栄冠のメダルを手にした人も少なくないでしょう。人間の人生に光の時と闇の時があることは、脚光を浴びる人の場合も普通の人々の場合も、全く同じですね。犯罪者に対する刑罰でも、自業自得の場合もあれば、冤罪、無実の罪の場合もありますね。このことは個人史の場合も、民族史の場合もあります。しかし、聖書の神様は、それらすべてを見ておられるのです。一つとして例外はありません。

◆今日の聖書における「隠れた事を見ておられる父が、あなたに報いて下さる」との御言葉も、当然、旧約聖書の歴史を踏まえた御言葉であることは言うまでもありません。そして、イザヤ書46章4節の御言葉、「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」と約束された神様は、その約束を必ず果たして下さいます。わたしたちの全ては、余すところなく、神様に知られています。見守られています。わたしたちは小さい者ですが、このような者を見放さず、身も魂も顧みて下さる主イエス・キリストの父なる神様を、常に仰ぎ見つつ、あの事も、この事も為そうではありませんか。私たちの幸いは、神様に顧みられていることの中にのみあるのですから。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父にして、わたしたちの父なる神様。

あなたは、わたしたちの身と魂に関わる一切の必要を満たして下さいます。新たに覚え、心から感謝いたします。どうか、わたしたちが、自分に関わる一切をあなたの御愛と御顧みにお委ねし、あなたの善き御心が地になるために、己が身と魂を捧げる者たちとならしめてください。この祈り、イエス様の御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。